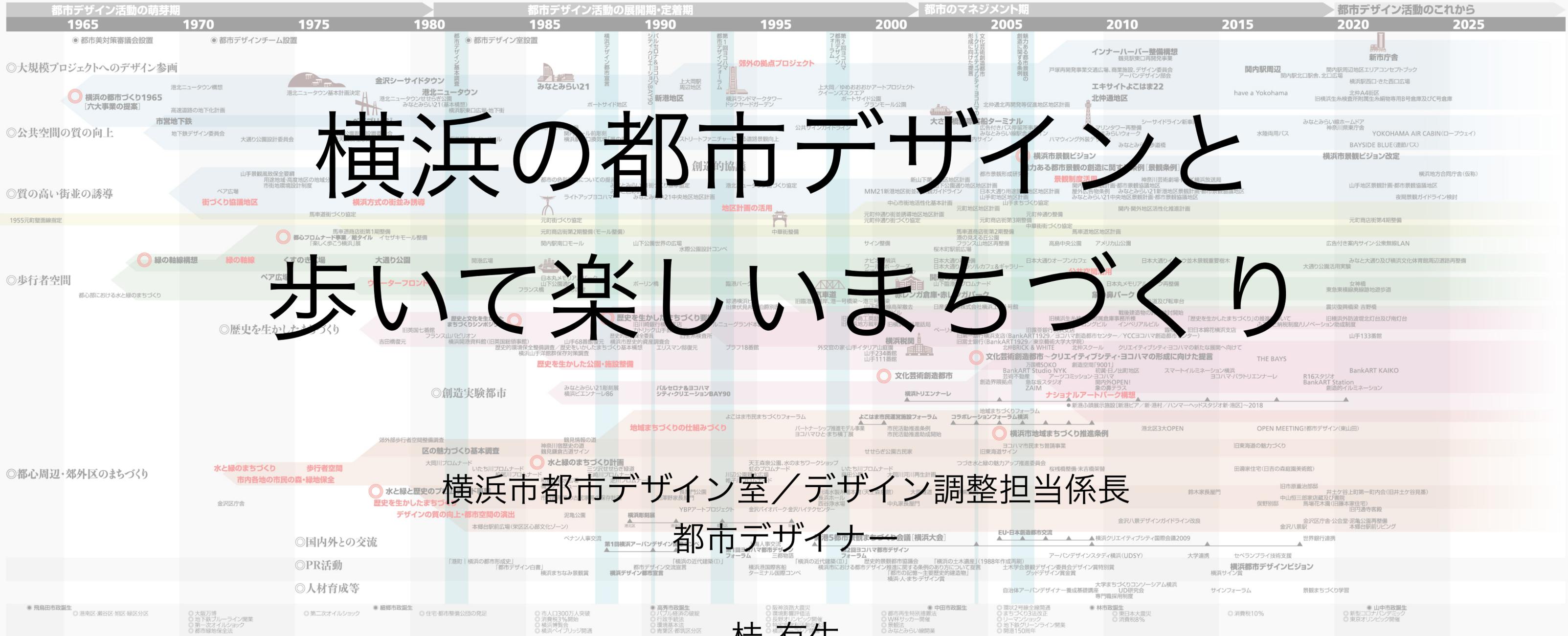
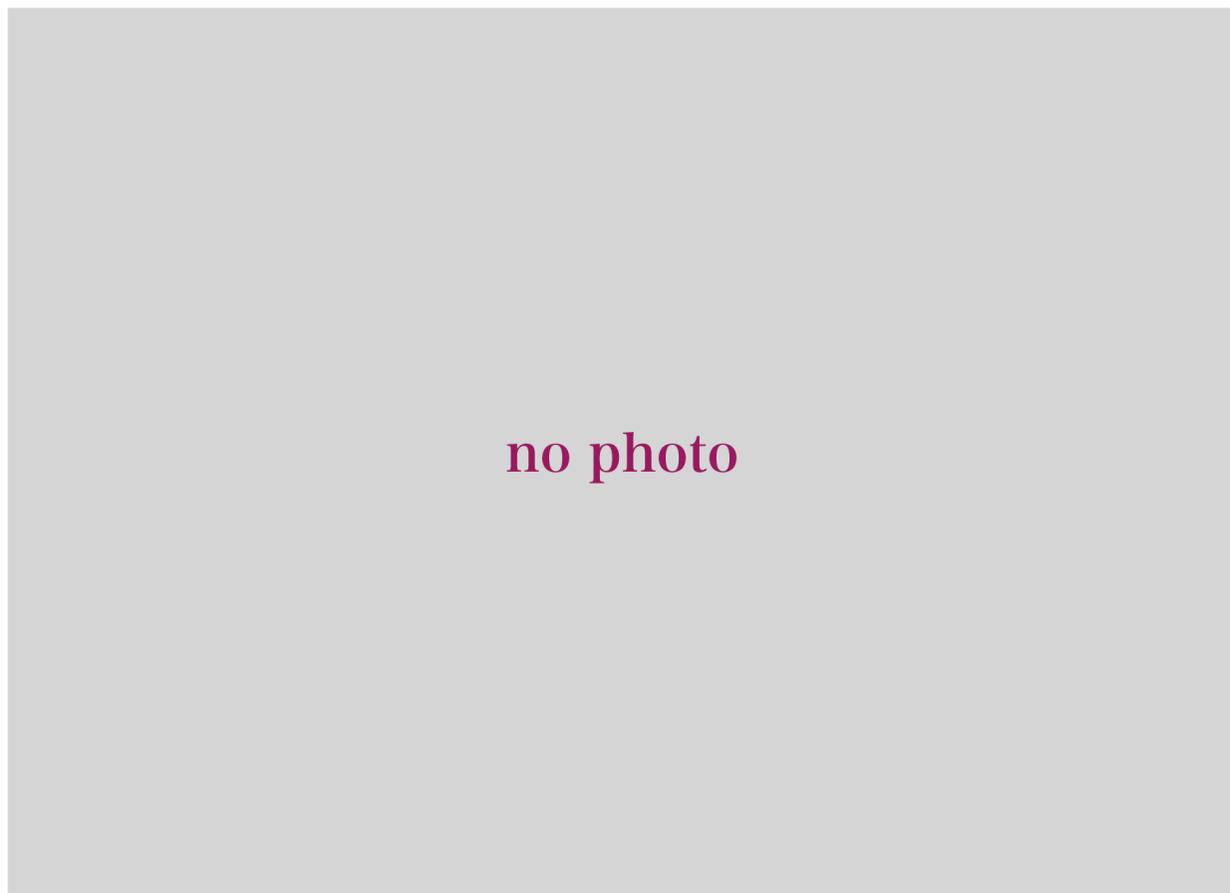


# 都市デザインの取組の展開図 [年表]



# 横浜の都市デザインと歩いて楽しいまちづくり



no photo

【いくつかの美術館やコンペなどを担当】

東京芸術大学卒業後、安藤忠雄建築研究所にて、いくつかの美術館やコンペなどを担当。建築の設計技術はもとより、社会に向かう姿勢やストイックさを学ぶ貴重な機会を頂いた。



【横須賀美術館】

市政100周年を記念してつくられた美術館。県立観音崎公園内、東京湾を望む立地から、ボリュームの半分は地下に埋められている。美術品を潮風などから守りつつ、周辺環境と一体となった鑑賞環境を生み出すため、ガラスの箱の中に入れ子状に殻を設け、そこに開けた穴によって光や視線をコントロールしている



### 【主な役割】

60年代に始まった横浜の都市デザイン。企画調整局による横断的調整を旨とし、都市空間の質の向上を目指して来た。80年代以降、その伝統は組織的にではなく、庁内文化・矜持として引き継がれ、その中心を都市デザイン室とインハウスのデザイナーが支えている。

2007年に初の都市デザイン専門職として入庁以来、質の高いデザイン調整を行うとともに、都市デザイン文化の維持と、都市デザインのアップデートにも力を注いできた。

- ・まちづくり・都市デザインの企画
- ・デザイン調整（横断的調整）
- ・公共空間活用
- ・発注のデザイン・官民協働の仕組みづくり
- ・共同研究（w/横浜国大・横浜市立大学）
- ・広報普及活動 など

建築・道路・公園・港湾緑地から農地や墓地、さらにはにぎわいやグラフィックまで、ハードやソフト、官民も問わず、組織・分野横断的に都市デザインに取り組み、年間30件以上/18年で500件以上のプロジェクトに関わる。

## 横浜の都市デザインの始まり

1971年、企画調整室に岩崎駿介氏、国吉直行氏の2人によるアーバンデザインチームが全国に先駆けて発足します。アーバンデザインチームの最初の取組テーマは「歩いて楽しい街」。当初は戦略的に都心部を活動の場としましたが、その後、企画調整室から企画調整局、都市デザイン室へと組織を移しながら、取組のテーマやエリアは大きく拡大していくことになります。



初期のアーバンデザインチームメンバー

## 「個性と魅力ある人間的な都市をつくる」

都市デザインの「7つの目標」は、車社会や経済効率の優先された当時において、人間を中心に据えたまちづくりの考え方を表明したもので、当時から変わらない、横浜都市デザインの普遍的な価値観となっています。初代・都市デザインチームのリーダー、岩崎駿介氏の考えた「擁護すべき価値」が元となって、つくられました。

### 1 歩行者活動を擁護し、安全で快適な歩行者空間を確保する

人が安心して堂々と歩けること、老人も子どもも、目的地まで車に圧迫されることなく、気持ちよく歩けることができることは、都市生活を豊かにする基本的な要件である。



汽車道

### 2 地域の地形や植生などの自然的特徴を大切にする

どんな地域にも地形をはじめ川や坂、樹木などの自然的特徴があり、その特徴がその地域らしさをつくってきた。そして、これからの地域の特徴づくりのヒントもまた、その自然的特徴の中に隠されている。



舞岡公園

### 3 地域の歴史的、文化的資産を大切にする

都市の生活を豊かにし、地域の個性を形づくっているものは、生活の積み重ねであり、都市の歴史である。その生き証人である歴史的建造物や文化的資産を極力保全し、未来につないでいくことが、物語のある都市づくりにつながる。



横浜税関と赤レンガ倉庫

### 4 オープンスペースや緑を豊かにする

都市の密度が高まれば高まるほど、何も無い広場や公園、ただ緑があることの価値は、対比によって高まる。都市内の農地や山林、河川、公園、そして緑が連続していることも大事である。



世界の広場

### 5 海、川などの水辺空間を大切にする

水に触れることは、都市での生活を豊かなものにしてくれる。港町である横浜では、活発な市街地を海辺や川面に面するようにして、市民が水に触れる機会を増やすことが大切である。



大岡川プロムナード

### 6 人と人がふれあえる場、コミュニケーションの場を増やす

都市生活では、他人とふれあうことで地域とのつながりが強まり、市民的な活動につながる。ホールなどの屋内施設だけでなく、都市デザインでは人の集まる街の接点に屋外広場を設けていくことも、市民生活を豊かにしてくれる。



左近山みんなのわ

### 7 形態的、視覚的美しさを求める

ここでいう都市の造形的・空間的美しさとは、都市が他者との交流を促す舞台として、驚きや喜びといった人の心に動きを生み出すように構成されていることを指す。現代で見落とされがちな、人間的な価値を発揚するために美しさや形態的秩序を用いるべきである。

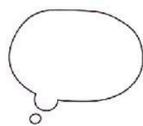


みなとみらい21中央地区夜景  
撮影：菅原 康太

# 【横浜の都市デザイン / 7つのアプローチと実践】

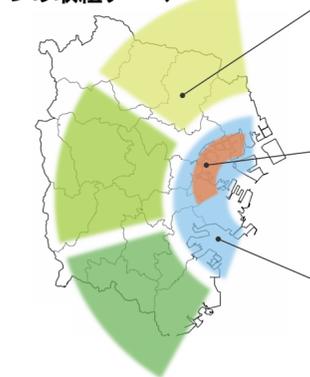
## 1 都市構想のデザイン

その地域の統一的目标となる将来像を示しつつ、まちづくりの様々な主体と話し合い、実現していくプロセスを提示する。



### 都市デザインの7つの取組み姿勢と3つの取組テーマ

#### 3つの取組テーマ

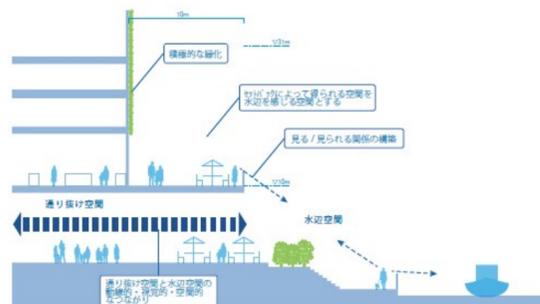
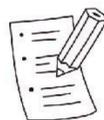


- テーマ1 住宅地から「多様なライフスタイルをかなえるまち」へ**  
→野庭団地におけるアップサイクルのまちづくり
- テーマ2 都心部での「継続的・発展的な展開」**  
→戦後建築の価値基準/保全活用
- テーマ3 海をひらく**  
→企業緑地のシェア、コンセプトブック作成

明日をひらく  
OPEN X PIONEER  
YOKOHAMA

## 4 誘導的都市デザイン

その地区の特性や、歴史的景観的特性を考慮し、より魅力的なまちづくりを目指した誘導ルールを定め、空間的コントロールを行っていく。

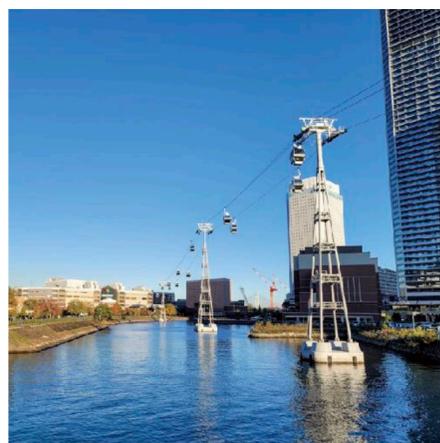


## 5 地域のマネジメント主体の育成・支援

地域の方と議論しながら、マネジメント手法やルールを地域主体で作ることを通して、地域マネジメントを推進する組織を育成・支援する。

**横浜・セベランプライ都市デザイン交流事業**  
●2015-2019

2015年12月から2019年、独立行政法人国際交流機構(JICA)の助成を得た事業として、マレーシアのクランタラ州を訪問し、「セベランプライ市の歴史・自然を活かしたまちづくりプロジェクト」(横浜の都市デザイン)をテーマに、横浜の都市デザイン研究員が現地を訪問し、都市デザインのノウハウを共有し、地域の活性化に貢献する。この事業を通じて、地域の活性化に貢献する。この事業を通じて、地域の活性化に貢献する。



# 【都市デザイン 横浜】

## 2 企画的都市デザイン

都市デザインとして取り組むべき新たな都市づくり事業の企画・立案を行い、都市づくりに新たな魅力要素を加えていく。最近では、実証実験を繰り返しながら事業運営者を育てるなどして、それに適した空間整備をすることもある。

参加者募集！  
横浜のこれからの「都市デザイン」を考える  
**未来会議**  
みらいかいぎ

これまで、横浜市では人間にとって住やすいまちを創るという都市デザインの行いにより、住みやすさやまちづくりの取組を進めてきた。令和5年度に都市デザイン30周年を迎え、今後の展開を考えた「未来会議」を開催した。この未来会議は、市内に所属する市民、企業、団体などからなる都市デザインのあり方を考える場として企画された。



## 3 調整的都市デザイン

その場に関係するすべての建造物の施主や設計者、道路・公園などの公共施設の事業主に働きかけ、相互調整を行いつつ、形態的なバランスと地域の特徴を生かした魅力ある都市空間を作り出す。

044

### みなと大通り及び横浜文化体育館周辺道路(みなふん)の再整備

●2020 道路活用実験実施 ●全長約1.5km

JR関内駅周辺では教育文化センター跡地活用事業、旧庁舎街区活用事業、横浜文化体育館再整備事業等により、来街者の増加と更なる賑わい創出が期待される。地区を貫く「みなと大通り」及び「横浜文化体育館へのアクセス動線」(合わせて通称「みなふん」)は各施設間の回遊性の向上とともに、関内・関外エリアの一体性を向上させる重要な動線として、車道幅を狭めて歩行者・自転車通行空間を拡充、滞在環境を向上する道路空間の再整備を行う。将来の再整備を見据え、車道を歩行者空間に転換した社会実験「みつけるみなふん」を2020年11月に実施した。



社会実験「みつけるみなふん」の様子

## 6 デザイン開発

都市デザインの視点から公共施設などのデザインを開発する。



## 7 都市デザインに関する研究とPR

都市デザインをさらに充実させ、市民理解を深め、共感を広げる。

### 都市デザイン研究会

●2019年 創設

当初は都市デザイン部の職員が中心のゲストを招いて、内閣の会として始まった。その後、このクオリティの話を都市デザイン部だけでなく、職員に開いて、関係者を共有し、仲間づくりにもつながるような機会を企画。現在では外部にも開かれたサロンのような意見交換の場となっている。現在は先進的なゲストによるレクチャー、ゲストと会場の意見交換・質疑応答に時間を費やす点、公開しからぬ

ごっつらん運行、変わった後の交通命である。これまでのゲストにはコミュニティデザインの山崎浩氏、コーディネーションデザイナーの豊田新介氏、広域ネットワークの山下裕子氏など、その後の活躍がまざまざと見られる。市の公式twitterに先駆け、講演内容の中核や質疑の要点などをtwitterを活用するなど、新しい取組も初期の頃から積極的に行われている。



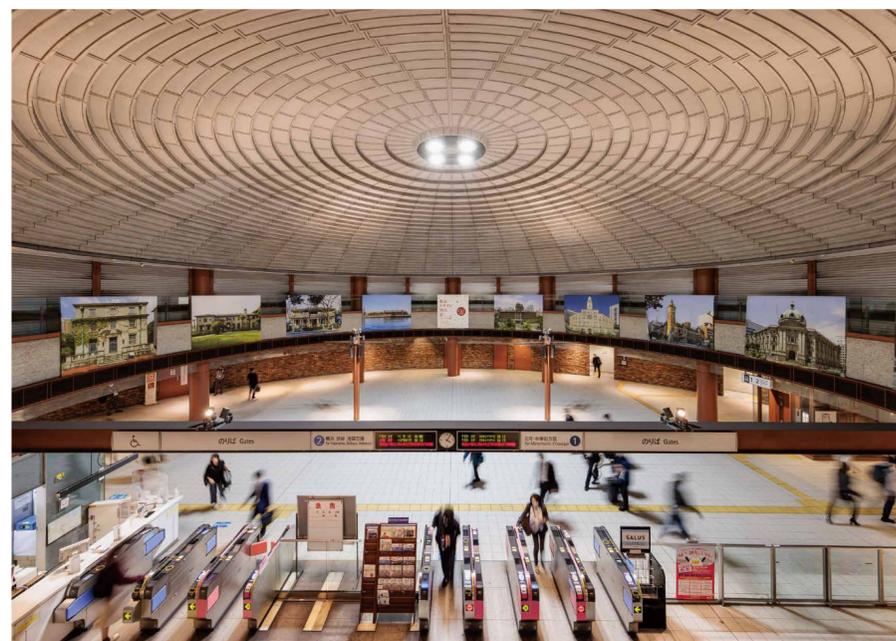




# 都市 デザイン 横浜 展

個性と  
魅力ある  
まちを  
つくる

2022.3.5(土) → 4.24(日)  
BankART KAIKO



## 【都市デザイン 横浜展】

1971年に都市デザインの専門チームが出来てから50年を記念した展覧会。専門家は元より、一般市民や比較的若年層に支持され、当初一ヶ月の会期を延長、最終的に来場者は1万人、同時に作成したカタログの販売数は3000冊を超えた。

## 【担った役割】

- ・ 50周年記念事業全体の企画統括
- ・ 展覧会の企画、構成、デザイン調整
- ・ デザイナー、写真家の選定
- ・ カタログの企画、執筆
- ・ 関連講演会の企画

会場構成：abanba

グラフィックデザイン：アスカコヤマックス/stgk

NOGAN/NDCグラフィックス

001  プロローグ / 都市 横浜  
Prologue

開港を機に港湾、商工業都市として栄え、住宅地、観光地としても人気のある横浜市。約438km<sup>2</sup>に及ぶ市域は18区に分かれ、約377万人が住む、日本有数の大都市です。開港以来の歴史を感じる都心部や、緑や丘陵地に恵まれた郊外部など、様々な魅力や個性を生かして、都市デザインの取組は横浜市全域で展開されてきました。

001

002  「都市デザイン 横浜」の誕生  
Genesis

開港以来、横浜の街は災害などの困難を乗り越えるたびに、街をより良く変えていくことを繰り返してきました。横浜の都市デザイン活動も戦災後の換取という横浜の特異な歴史の先に誕生したものです。

ここでは横浜の歴史をなぞりながら、なぜ横浜が都市デザイン活動を始めに至ったのか、そして都市デザインとはどのような活動なのかに迫ります。

002

003  都市デザイン50年の実践  
Practice

横浜の都市デザインでは、都市空間の「質」にこだわり、大規模プロジェクトから、ランドスケープ、建築、ストリートファニチャー、街なかのグラフィックまで、デザインをしてきました。

ここでは、都市デザイン50年の実践と、その成果としての都市空間を、実際の街中にあるかのような映像を用いて、表現しています。

003

004  都市デザイン手法の展開  
Progress

横浜の都市デザイン活動は「歩いて楽しい街」を皮切りに、50年かけてそのテーマや取組、エリアを拡大させて来ました。これは「魅力と個性ある人間的な都市」「7つの目標」といった普遍的な価値観を持ち続けながら、場所の特性やその時々の実情に合わせて柔軟に「実践的都市づくり」を行ってきた結果でもあります。

ここでは主な都市デザイン手法を題材に、その展開を見ていきます。

004

横浜・風景の解剖  
Anatomy  005

横浜を代表するいくつかの風景。都市デザインが積み重ねてきた多くの工夫によって、今の姿があります。しかし、説明を聞かずにその仕掛けに気づくことは難しいかもしれません。

最後のコーナーでは、横浜を代表する写真家・森日出夫さんの風景写真から、都市デザインの痕跡を取り出して、紹介します。

005



比較的理解しにくい「都市デザイン」を誰にでも分かりやすい言葉と模型や写真、映像、ハッシュタグなどを用いて伝えようと試みた。また、一般市民を味方とすることで、庁内外での都市デザインの復権を目指した。

ブラタモリのような展示。

# 【横浜の都市デザイン / 風景をデザインする】

## 象の鼻パーク 「開港の地」から、 市民の憩いの場へ

1859年、この場所に東洋止境と西洋上陸の2本の突堤が完成し、日本は開国。市に島の鼻地が「開港の地」です。開港の物語、文脈の多くがこの場所から生まれてきたとされ、象の鼻パークは「開港の地」から、市民の憩いの場へ変身しました。その後、象の鼻公園整備計画が「開港の地」から「開港の地」へと変身しました。長く港開港の歴史として、一般の立ち入りは出来ずでしたが、横浜開港150周年を記念して、港開港地として整備され、誰でも入れる市民の憩いの場となりました。



## 北仲通地区 関内とみなとみらい、 2つの街の交わる場所

横浜ランドマークタワーから野田方向を見下ろすと一重層前に見えるのが北仲通地区です。市庁舎の建つ関内と北仲通地区はつくづく目と鼻の間にあった2つの街であり、北仲通地区は日本の開港地である横浜の象徴的な場所です。関内と北仲通地区はつくづく目と鼻の間にあった2つの街であり、北仲通地区は日本の開港地である横浜の象徴的な場所です。関内と北仲通地区はつくづく目と鼻の間にあった2つの街であり、北仲通地区は日本の開港地である横浜の象徴的な場所です。



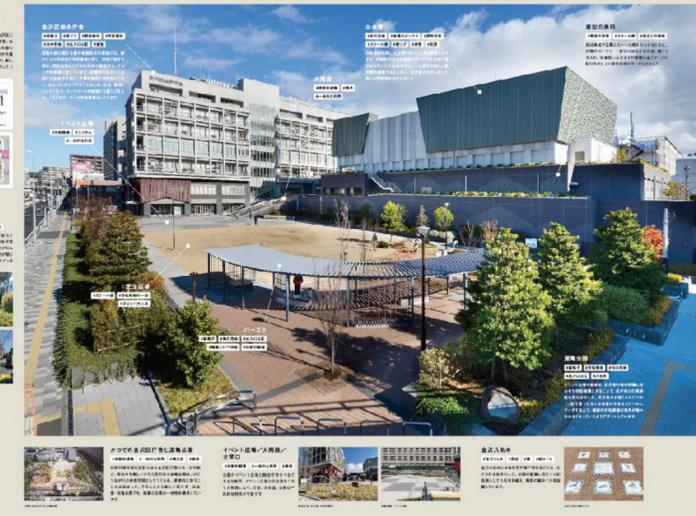
## 金沢八景駅周辺 横浜 南の玄関口として 歴史ある「金沢らしさ」をつくる

鎌倉時代から続く源氏神社や、日蓮宗寺、御伊勢山・無量山などの歴史・自然の環境に恵まれ、文藝の町でもある金沢八景駅周辺は、横浜の玄関口として、個性あるエリアとしていま、再開発事業によって駅前一帯を再つくりしていく計画で、ローライブラリー・商店街などの先行する公共事業で、金沢を象徴する「金沢らしさ」のモチーフを取り入れ、長く親しまれる建物にも関わりを取り組んでいくことで、「金沢らしさ」の感じられるエリアが形成されていく予定です。



## 金沢区総合庁舎／金沢公会堂／泥亀公園 金沢らしさと 三位一体のデザイン

金沢区庁舎・公会堂の建築の際に、合わせて新たに整備される泥亀公園のデザインも一体的なデザインを追求しました。発行していた金沢八景駅と「金沢らしさ」デザインがもたらしたことから、金沢八景駅で育んだ歴史を表現しつつ、市松模様などのこの場所独自の表現も導入して、金沢区庁舎、公会堂、泥亀公園がその空間でつながりを持つデザインとなりました。



デザイン調整による質の高い空間

同一エリアで幾重にも重ねる

金沢八景区画整理：格子や切妻屋根、市松模様などと壁面緑化の組合せなど

↓  
公共空間活用の提案  
(象の鼻パーク／テラス)

デザイン調整 (5事業)

↓  
デザイン手法の開発  
(新しい建築での歴史性表現など)

↓  
点から面へ

時間をかけた風景のデザイン

↓  
別エリアでの応用と面的展開  
戸塚再開発：江戸時代のカラーコード四十八茶百鼠格子や市松模様と壁面緑化の組合せなど



# 【都市デザイン 横浜】

## 歩道拡張

#ウォークアブル

みなとみらい線整備の機会を捉えて、車道部分を狭めて銀杏並木の内側にも歩道を広げる再整備を実施。歩行者がゆったりと歩ける道路となりました。



歩道拡張前の日本大通り

## オープンカフェ

#コミュニケーション

#公共空間活用 #ウォークアブル

ゆっくりと街並みや歴史ある雰囲気を楽しんでもらえるよう、拡張した歩道にオープンカフェを出せるしくみをつくりました。沿道店舗と協力して、当初は実験的に開始。その後、地元組織である日本大通り活性化委員会と市で協定を結び、オープンカフェの常設化を実現しました。



オープンカフェの様子

## 楽しいデザイン

#ディテール

#グラフィック

日本大通りでは大きな計画だけでなく、街歩きを楽しんだり、心地よく過ごしてもらいたい。ちょっとした細かいところまでデザインされています。



県庁前には横浜三塔のプレート  
景観重要樹木のプレートはトランプがモチーフ

# 日本大通り



## 景観重要樹木

#銀杏 #歴史 #都市軸 #緑

火に強い樹として震災後に植えられ、美しい黄葉が市民にも愛されている銀杏並木。街並みの重要な要素として景観重要樹木に指定し、きちんと管理されるようにしています。歩道の石の色も銀杏の実による汚れが目立たないよう、配慮して選んでいます。

## 通景の確保

#都市軸 #ヴィスタ #その先は衆の鼻

照明機器などの構造物は銀杏並木の列に合わせて配置、駅の出入口の屋根をガラスにして透過性を高め、道路標識も移設するなど、様々な工夫によって通りの通景(ヴィスタ)を確保しています。

## 高層部のセットバック

#ルール #歴史的建造物への配慮

地区計画により、建築物の建て替え・建て増しの際は、歴史的建造物(31m)よりも高い部分を大きく壁面後退(セットバック)してもらうことで、通りからの圧迫感を軽減し、歴史的建造物の風格を阻害しないように工夫しています。

## 铸铁

#歴史の表現 #周辺との調和

#ダークグレー

照明灯や車止め、植栽防護柵などには重厚感のある铸铁を用い、色味もダークグレーで統一することで、周辺の歴史的建造物とも調和した共通のデザインとしています。

## アスファルトにもひと工夫

#周辺との調和 #ディテール #素材

歴史的建造物や銀杏並木に馴染むよう、車道のアスファルト舗装にも、黄・赤・灰色の骨材を混ぜ、色彩を調整しています。

## ゆるやかな勾配

#本町通りが「横」に長い「浜」

#微地形 #埋立の歴史

## 植栽防護柵

#ベンチ風 #ウォークアブル #ディテール

多くの人が座っているこの場所、実は正式にはベンチではありません。本来は大事な銀杏を守るための柵ですが、座りやすい形にすることで、疲れたらひとやすみ出来るようなデザインにしているのです。

## 出来るだけ平らに

#セミフラット #イベント利用

#公共空間活用 #ウォークアブル

歩道と車道との段差を極力少なく、ほとんど平らにすることで、誰もが安全に歩けるようにしました。イベント時には車道と歩道を一体的に使えるよう、車止めも外せるようにしてあります。

# 取組の積み重ねが つくり出す、 街のシンボルロード

関内の中心にあたる日本大通りは、1866年に起きた大火の後につくられた、日本最初の西洋式街路です。日本人街から外国人居留地への延焼を防止するため、幅36mと広幅員で計画されました。2004年のみなとみらい線開通に向けて、港と横浜公園を結ぶ開港シンボル軸として再整備され、歩きやすく、歴史を感じられる、横浜を代表する通りとなっています。

## 歴史的建造物の保全

#歴史 #保全 #復元 #活用 #様々な手法

日本大通りに面した歴史的建築物の多くは震災復興時につくられており、開港以来の官庁街としての歴史が感じられます。横浜情報文化センター(旧横浜商工奨励館)は、もともとあった歴史的建造物を低層部にそのまま保存し、レストラン等として活用。一方、横浜地方裁判所は、建て替えに伴い元の歴史的建造物を一度解体したのち、新しい建物の低層部にその外観を元の通りに復元するなど、建物ごとに様々な手法を駆使して、当時の街並みを保全しています。





設計者：

JR関内駅：JR東日本建築設計

関内駅北口広場：オリエンタルコンサルタンツ  
コンテンポラリーズ

### 【JR関内駅＋関内駅北口広場】

JR駅舎のバリアフリー化に合わせた、市の広場整備事業。併せて当初、馬車道や伊勢佐木の反対側を向いていた駅を街側に向けて顔づくりすることを目的としている。異なる主体間、土木と建築、さらに7年に渡る長期プロジェクトの中で、横断的調整を行いながら、質の高い公共空間の実現をはかった。

### 【担った役割】

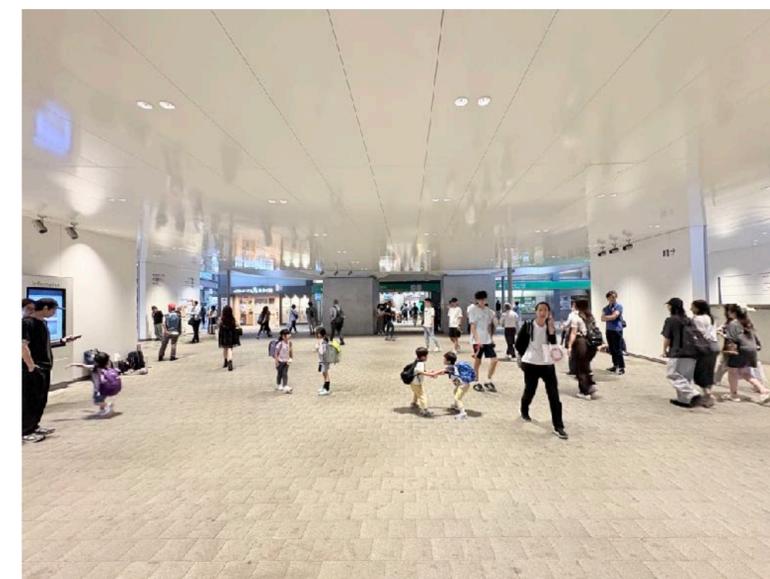
- ・ 設計推進体制の構築  
（外部有識者によるデザイン部会の設置）
- ・ 広場のデザイナー（建築家）の選定
- ・ 駅舎と広場の設計者合同ワークショップ
- ・ 駅舎と広場の共通コンセプトの策定
- ・ 歩行者空間の拡充推進  
（歩道拡幅＋商店街へのアプローチの整備）
- ・ 長期プロジェクトにおける推進体制の維持

## 【横断的調整とその仕組み】

JR駅舎と公共広場（道路）という異なる主体が長期（7年間）に渡って、街の顔をつくるプロジェクトだったことから、外部の専門家からなるデザイン部会を設け、調整を図った。さらにこのプロジェクトでは一歩踏み込み、駅舎、広場の実務設計者による合同設計ワークショップの場を設け、共通のコンセプト「NEW in OLD」（開港の街に新しいものを挿入する）を掲げて、一体的なデザインとなるようプロデュースする役目を担った。

また、デザイン性とまちづくりへの深い理解が必要とされたことから、広場の土木設計コンサルの下に地元の建築家を登用し、より横浜・関内にふさわしいデザインを行える体制づくりを担ってもらった。結果として広場の大屋根の曲面は、そのままJR駅舎の天井にスムーズにつながり、街のシルエットをイメージした「壁柱」が駅舎と広場の連続したファサードを生み出している。

併せて拡張した歩道は、既に先人たちが実現した南口の歩行者専用道路化を受けた「下の句」であり、今回実現できなかった北口の歩行者専用道路化は駅前再開発と合わせて数年後に実現する予定となっている。



上の句：関内駅南口歩行者専用道路化 → 中の句：北口広場と歩道拡幅（今回整備） → 下の句：再開発に伴う歩行者専用道路化（将来形）

## 【JR関内駅舎 + 関内駅北口広場】



道路活用実験

# みっける みなぶん

2020.11.9 mon — 11.30 mon  
みなと大通り及び横浜文化体育館周辺道路

設計者：  
日建設計シビル  
オンデザイン  
カナコン

Discover your place!  
あなたの場所をみつけよう！

みなぶんってなんだろう？何がみつけられるんだろう？  
そんなギモンを持ったあなたは、もうみなぶんの入口に立っています。  
「みっけるみなぶん」はみちの新しい使い方をみつける実験のこと。  
さあ、みなぶんであなただけの場所をみつけよう！



### 【社会実験：みっけるみなぶん】

市役所の移転に伴い地域の衰退が懸念されたため、横浜市は旧市庁舎跡地を含め、関東学院大学、BUNTAIなどの大規模な開発誘導を進めてきた。これらの開発と、多くの来街者のいる港エリアとの接続向上を図って「みなと大通りおよび文体周辺道路（みなぶん）」の歩道空間拡幅を現在、行なっている。

横浜の都市デザイン文脈に加えて、ウォークブル、ほこみちといった制度が整う中、拡幅部分の利活用を前提としていたため、設計に先立ち、活用と交通影響の両方を検証するため「社会実験：みっけるみなぶん」を行なった。

### 【担った役割】

- ・ 庁内体制の構築、設計プロポーザルの推進
- ・ デザイナーと行政、双方を理解する「通訳」
- ・ コンセプトの設定
- ・ 活用実験、ワークショップの設計
- ・ パークレット、什器検討
- ・ 機運醸成、地域団体調整

## 道路活用実験「みっけるみなぶん」の結果について

### 1. みなと大通り及び横浜文化体育館周辺道路の再整備事業に向けた社会実験の実施について

みなと大通り及び横浜文化体育館周辺道路の再整備の検討に先立ち、車道の一部を規制し、歩道を広げるなど、人や車の流れや沿道の利活用について検証する社会実験「みっけるみなぶん」を実施しました。実験実施期間 令和2年11月9日-11月30日



### 2. アンケート調査結果について

期間中にWEB及び歩行者を対象としたアンケート調査等を実施し、約400人の利用者の皆様から回答を頂きました。アンケートの主な意見は、以下のとおりです。

- ・8割以上の回答者の方に**社会実験を「良い」と評価**して頂きました。
- ・肯定的な意見としては、**歩道が広がることへの期待**や**休憩するの**にちょうど良かったなどの意見がありました。
- ・否定的な意見としては、**自動車渋滞への懸念**などがありました。
- ・再整備後の道路空間に期待する役割では、「軽く休める憩いの場・座れる場所」が最も多く、次いで「快適な歩行環境」となりました。



### ★利活用空間（みなぶんでき）の利用について

・相生町一丁目交差点付近の利活用空間では、実験期間中に約3,700名の方が利用し、賑わう場面も見受けられました。また実験前より、実験中の方が歩行者量は増加しました。



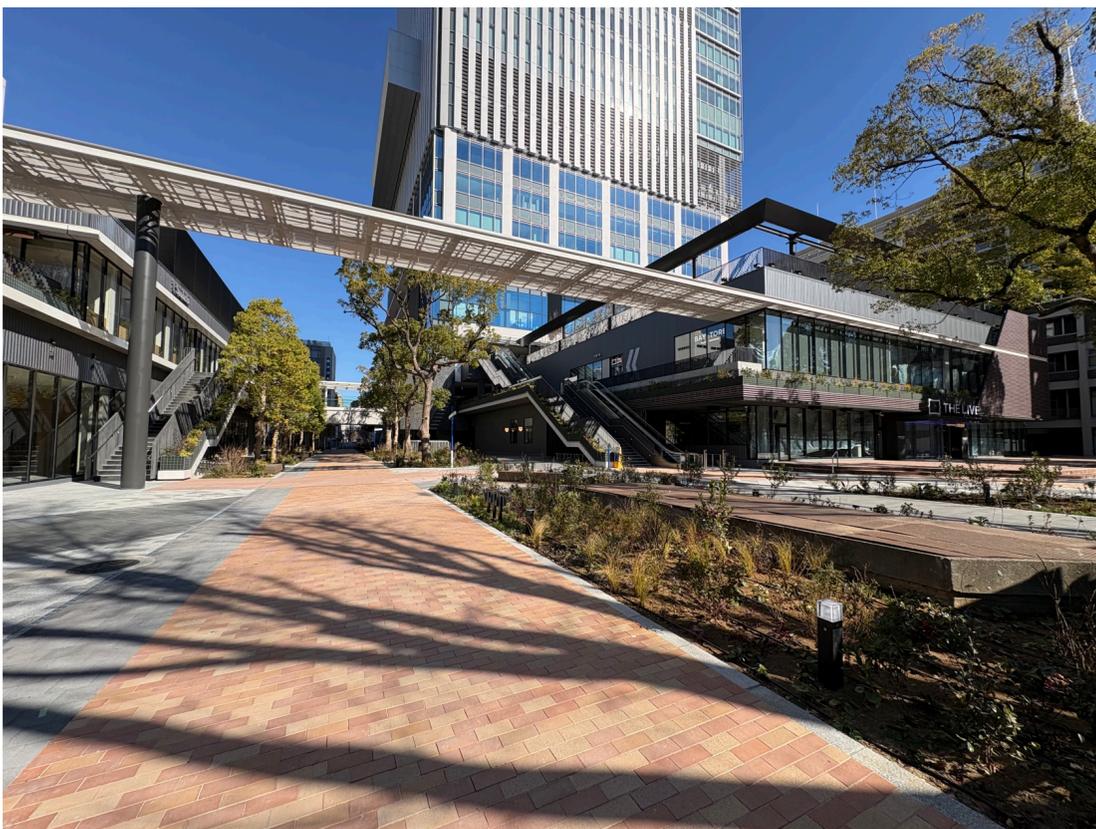
## 【社会実験：みっけるみなぶん】

関内のシンボルロードである日本大通りと併走するみなぶん。設計に際して、あらかじめ使うことを想定して、社会実験により、その具体性を確認しながらソフトをハードの設計に反映する手法を取りました。そのための活用需要、車両通行への影響を検証するため、行なった社会実験が「みっけるみなぶん」です。これまでに2シーズン開催。

また、プロポーザル時の提案では可動什器を含む、活用を促すための特殊な提案がなされていた。設計者としては提案の肝に当たる部分であり、市としては受入れの難しい提案でもあった。その提案の効果や課題の洗出しにも社会実験は行われ、そこで得られた成果を設計に反映する際に、管理の容易さや普遍性を求める公務員思考と、良いもの、新しいものを生み出そうとするデザイナーの間に入り、安易に妥協するのではなく双方の視点を極力両立させることを目指した。実験中にはワークショップの開催やキッチンカーでの賑わい検証なども行い、運営団体の組織化、機運の醸成、各開発との連携なども模索された。なお、みなぶんを横断するデッキのプロポーザルやデザイン調整も行っています。



# 【ハードとソフトの横断】



※後に設計変更があったため、  
現在施行中のみなぶんは  
当初設計提案とは別物となっている

# 【社会実験：みっけるみなぶん】



設計者：

楨総合計画事務所+竹中工務店

## 【横浜市新市庁舎+デザインコンセプトブック】

デザインビルド方式が採用され、事業者決定時にはほとんどのデザインが決まることが予想されたため、発注前に予め市庁舎に求める「広義のデザイン」を規定し、事業者向けにまとめたもの。市民に対しては市役所としての公約ともなる。水辺の価値の向上、開かれた低層部、横浜の歴史性の表現、シンプルな高層棟などが記載されているが、作成の過程でのJIAとのコミュニケーション、その後の市民ワークショップ、デザイン調整や都市美対策審議会もスムーズに運営することが出来た。

## 【担っている役割】

- ・新市庁舎デザインコンセプトブックの作成
- ・設計者選定後のデザイン調整、都市美対策審議会
- ・低層部にぎわい検討、プレゼンテーションスペース企画
- ・市民向けシンポジウム&ワークショップ企画
- ・歴史的遺構の保存、展示監修
- ・運用後の低層部にぎわいのサインデザイン
- ・高層棟のカラーライトアップ調整
- ・低層部、水辺エリア活用の社会実験
- ・隣地のURとOpen Kitanaka Project（北仲南エリア活性化）

# 【横断的調整とその仕組み】

「横浜市新市庁舎デザインコンセプトブック」

新市庁舎のミッション：

～開港の街から持続可能で豊かな国際都市へ～  
 人、自然、街がつながる開かれた市庁舎を具現化し、  
 市民と共に OPEN YOKOHAMA を創出する。

⇒ 権威的な高層ではなく、低層部での市民活動や  
 賑わいこそがシンボルとなる開かれた市庁舎。



水辺に人が憩うよう促すような計画を行うことが賑わいの創出につながります。



水辺の活動をサポートするような店舗の事例

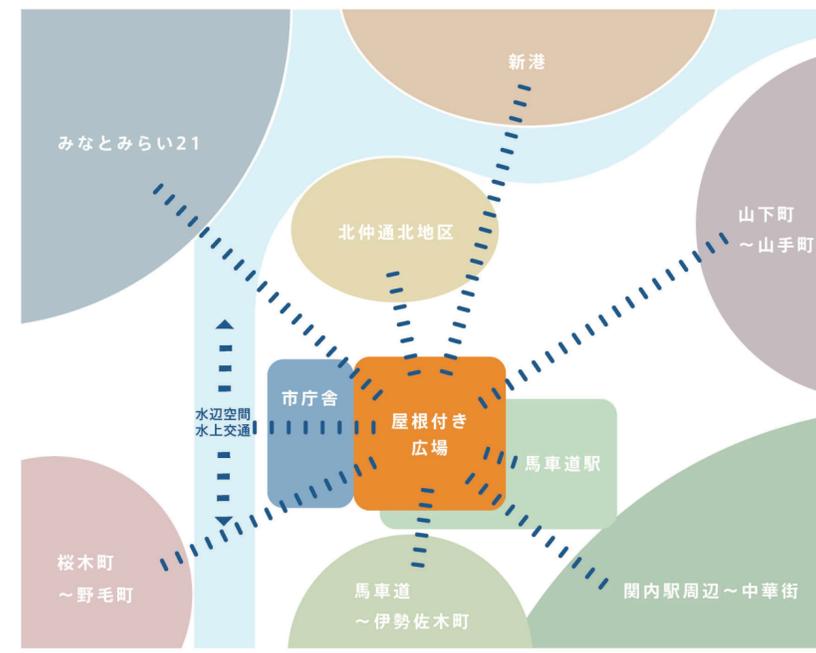
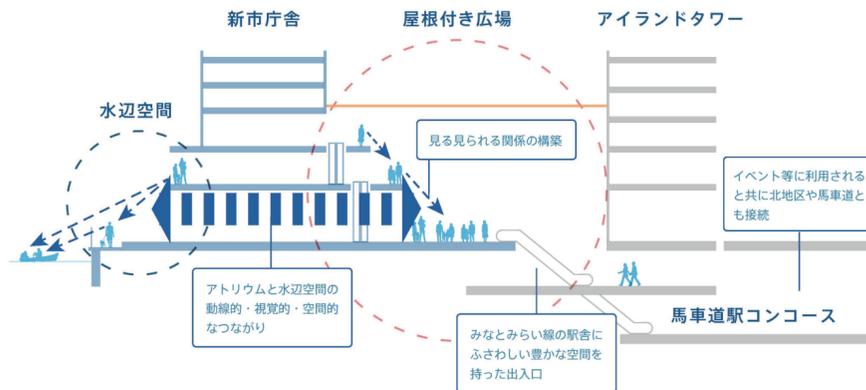
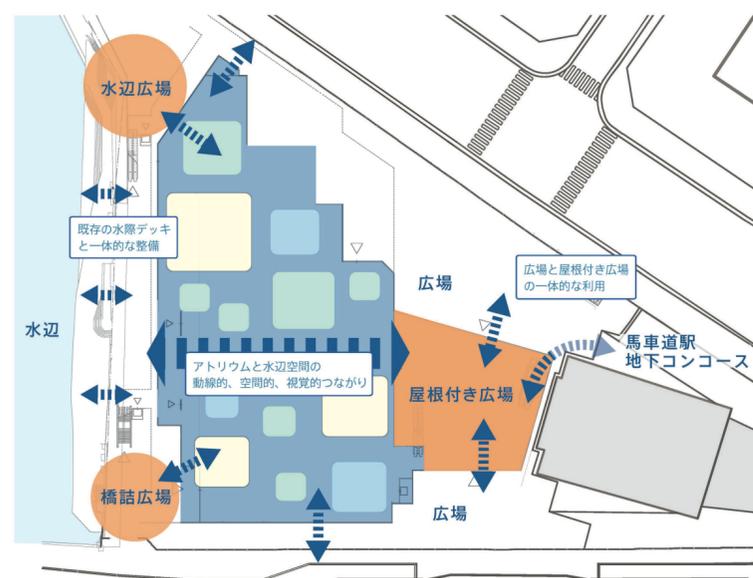


水辺やそこでの活動と見る見られるの関係をつくる事も水辺を開く為に重要な工夫の1つです。



歩道としてだけでなく人々の活動を促す溜まり場をつくることも大切です。

公共建築ではあるが、民間提案募集のため、コンセプトブックは官民協働のためのツールでもある。そのため、検討してもらいたい重要な事項と方向性は記述したが、民間のノウハウが存分に発揮出来るように、解釈の余地や提案の余白を残すような表現を心掛けた。



屋根付き広場は各エリアを結ぶ「まちのノード」の中でも中心となる場であり、市民活動やカフェの様な賑わいの主要な場もあります。



